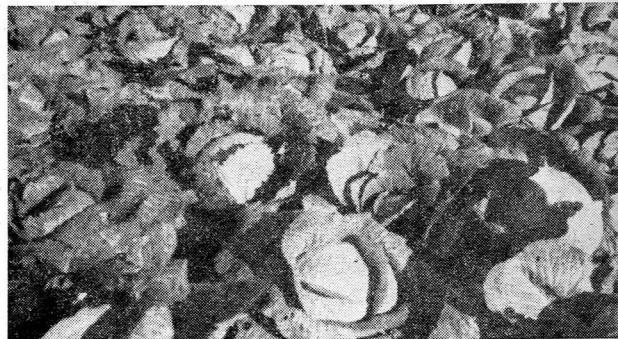


東北・北海道の カンラン栽培 / 中原忠夫

日本におけるカンラン栽培は明治初期、開拓使の導入によって始まり、もともと冷涼な気候を好むということと、当時導入された品種の関係もあって北海道で初めて栽培に成功したという歴史をもつてゐる。爾來利用法の普及により栽培もふえ、今日では主要野菜の一つに数えられるようになつた。以来東北、北海道はカナランの主要産地として府県に大量移出して來たが、戦後、需要の増加とともに、府県における暖地適種の育成、周年栽培体型の確立によつて移出量は減少し、現在ではむしろ冬季から春先にかけ、かなりの量が移入されるようになつた。



はじめに

病害虫の発生が多く見られる様になり栽培上高度の技術を要しないから産地の移動はげしく、新産地にて出荷時期の計画もないまま、早春の播種に集中して、破球、裂球にあわてて収穫出荷するということが行なわれ、そこで市場側に破球がおそらくまたタナモチの良い品種でないと安心して販売出来ないという先入感を与え、四季取系、南部系の栽培が伸びておる。しかしながらランの品種は飽くまで生食が主体なのであるから、鮮度の高いということは勿論、やわらかくておいしいことを第一の条件として考えなければならない。何れの品種をとりあげるにしても、その特性を充分生かした栽培管理がなされなければ市場性を高めることはできない。

四

府県では殆ど年中生産されるのに反し、東北、北海道にては生産時期に限度があるからといって地場消費にだけ止まるものだらうか。現在北海道で栽培されているいづれの品種をとりあげて見ても、いかに府県の品種改良が進んでおるとはいえ、品質については全く追従を許さないものをもつてゐる。むしろ立地を生かして上質のものを生産し、上手に壳込むならば、一年一作に止まり、出荷時期の幅もせまいかも知れないが、もつと府県市場にのぼしうるものと考えられる。今迄あまりにも適地といふところから、また作り易いために、栽培技術、品種改良に対する検討がなされなかつた。今後この面の進展を望みたい。

(4) 極早生群 東北、北海道で栽培されている主要品種をとりあげてみると

(4) 晩生種群
最も栽培の多い品種で初秋どりから貯蔵用にも使われる。昔見られた大平型の七一〇号にもなる。ハンダゴーは殆ど栽培されなくなり、一五〇日位の腰高畠円の札幌大球で代表される。札幌大球は筆者も多く、系統に分けてあるが、青緑色で大じわと蠟質物の多いのがある。

結球日数一三〇日内外の品種で、七月下旬八月中の出荷に向け、扁円球のサクセッショーン、四季取系は播種期の幅が広い。質

(四) 中生種群

品種名		結球日数	最大葉長	葉幅	結球重	球径指	備考
デトマシュ	日	94	28.8	29.6	682	99	以下 4月2日播
フォーシング	cm						
アラスカ	94	29.2	28.6		687	97	
デトマーシュ	105	33.6	31.0	1,052	95		
ゴールデンエーカー	110	35.8	35.0	1,749	105		
コペンハーゲン マーケット	115	38.2	35.3	1,840	86		
F ₁ 早生(育成系)	130	40.7	38.0	2,729	82		
大型コペン	130	38.5	36.6	2,866	95		
早生三メ目	135	44.3	41.5	2,547	103		
サクセッション	135	39.8	41.2	3,055	72		
F ₁ 四季咲	132	41.7	45.0	1,952	71	以下 4月20日播	
F ₁ 中生(育成系)	140	39.0	48.0	2,867	72		
ともえ	140	44.0	45.0	3,596	64		
南部	145	38.0	40.0	2,840	65		
札幌大球	150	46.0	48.0	3,718	67		
パンダゴー	155	37.0	40.0	3,273	64		

昔から有名なタケノコ型に結球するアーリー・ジャーシー、中野早春、富士早生、四季取系があり山形以南で越冬可能である。この群に属するものは品質、結球性は良好でないが、秋播しても早期抽薹しない。ただ早期抽薹しないといつても越冬前の苗の苗大きさに問題があり、本葉一四枚以上の苗になると抽薹の危険がある。

第1章 カンラン品種比較試験

昭 35-36 上野幌育種場

品種名	結球日数	最大葉		結球重	球径	指數	備考
		葉長	葉幅				
デトマッシュ	94	28.8	29.6	682	99	以下	
フォーシング						4月2日播	
アラスカ	94	29.2	28.6	687	97		
デトマー・シュ	105	33.6	31.0	1,052	95		
ゴールデンエーカー	110	35.8	35.0	1,749	105		
コペンハーゲン	115	38.2	35.3	1,840	86		
マーケット							
F ₁ 早生(育成系)	130	40.7	38.0	2,729	82		
大型コペン	130	38.5	36.6	2,866	95		
早生三メ目	135	44.3	41.5	2,547	103		
サクセッション	135	39.8	41.2	3,055	72		
F ₁ 四季取	132	41.7	45.0	1,952	71	以下	
F ₁ 中生(育成系)	140	39.0	48.0	2,867	72	4月20日播	
ともえ	140	44.0	45.0	3,596	64		
南部	145	38.0	40.0	2,840	65		
札幌大球	150	46.0	48.0	3,718	67		
パンダゴー	155	37.0	40.0	3,273	64		

栽培法

い系統が耐暑性や耐病性に富んでいる。一三〇—一四〇日前後の南部、ともえは葉質かたいが耐虫、耐病性にとむ。これらの品種は吸肥力強いので肥切れすると小玉になりやすい。

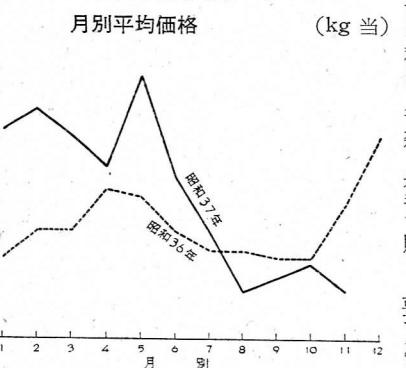
(二) 秋蒔品種群

昔から有名なタケノコ型に結球するアーリーイヤーシー、中野早春、富士早生、四季取系があり山形以南で越冬可能である。この群に属するものは品質・結球性は良好でないが、秋播しても早期抽薹しない。ただ早期抽薹しないといつても越冬前の苗の大きさに問題があり、本葉一四枚以上の苗になると抽薹の危険がある。

第2表 北海道、東北におけるカンランの栽培型

栽培型		品種名	播種期	定植期	収穫期	備考
時期	品種群					
春播栽培	早生種	アラスカデトマーチュコベンハーゲンマーケット	2下～3下	4中～5中	6上～7中	温床育苗 早春定植は紙テント使用
	中生種	早生三メ目サクセッション四季取	4上～5上	5下～6中	7下～9上	} 播種期の幅広い、 栽培最も多い、 直播も可能
	晩生種	札幌大球 南部と 南 パンダモエー	4中～5中	6上～7上	9中～11上	
夏播栽培	耐寒種	南部四季取 ニューオレゴン四季取	6中～7中	8下～9中	12上～3上	山形、宮城南部 降雪前に8分結球
秋播栽培	秋播種	富士野早生 中豊田早生 アーリージャーシー	9上～10上	4上～下	6上～中	山形庄内地方育苗 秋田、岩手、青森に栽培多い、

第1図 札幌中央市場カンランの

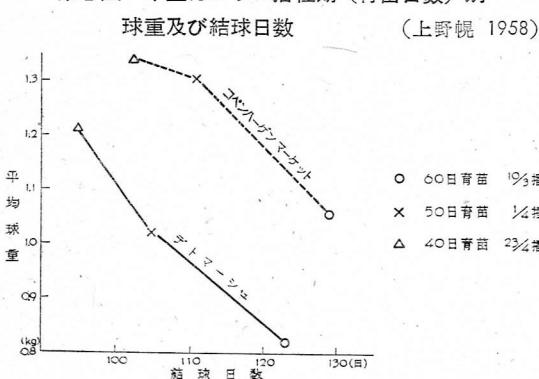


が八分程度と、いう条件もある
り、品種と播種期、耐雪性、
育苗技術等問題も多いが積雪
の多い地帯で漸次伸びてい
る。また秋播栽培も試みられ
ているが、栽培の多いのは山
形の庄内地方で水田跡に下種
され、そのまま越冬した無移
植苗を秋田、青森、岩手で購

芽はひまかからり 苗の生育をよくするのでそれだけ早播しなければならず、立枯なども出易い。温床に踏込む釀熟材の厚さは二月で三〇秀、三月に入ると二〇~二五秀ぐらいで良い。普通四月以降の育苗には播種床でも断熱材を一〇秀ぐらい入れただけの冷床で問題ない。

ろを間引き、換気につとめ苗の
生長を伸ばす。

第2図 旱生カンラン播種期（育苗日数）別



おそらくとも二一三枚迄に終わらせる。中晩生種の比較的粗放栽培では無移植育苗が行なわれているけれども、定植の一〇一四日前にスコップで軽く苗を浮かして灌水し、新根の発生を見て定植すると植え傷みを多少やわらげることが出来る。定植苗の

につれ早生と中生種の中間に品薄となることがある。秋出し栽培は東北、北海道で最も広く行なわれており、府県にも出荷される。この時期の品種は札幌大球が主体となる。

入して栽培する方法で、四月上旬定植、六月初旬に収穫される。極早生種の春播栽培に較べ、育苗の手間がかからず、大玉となるが、品質は劣っている。

(4) **移植と苗床日数**
五月以降の育苗はアオムシ、アブラムシの発生著しいから発芽当時でも注意して防除につとめなければならない。

大きさは本葉七~八枚である。

一回移植苗でも苗床日数の長短によって定植後の生育に差が見られ、第二図の様に苗床日数が長くなるに従い球の肥大悪く、また結球日数も長い。更に不結球株も多く見られるといふこともいわれている。従つて育苗に当つては、温度条件、育苗操作を最適にしてなるべく短期間、即ち四〇日位の育苗とすべきである。

(2) 定植

苗は葉柄短く、葉身丸味をおび、茎太く節間のつまつたものをえらび、タップリ灌水し丁寧に苗取りして植付ける。

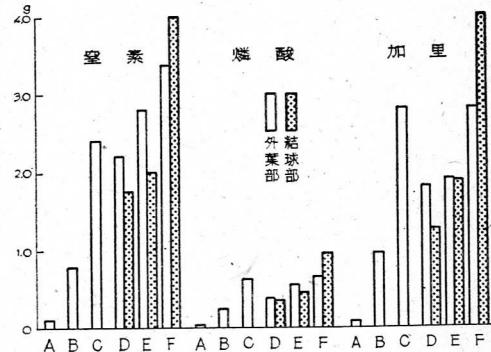
市場の傾向は出廻期によつて多少違う様であるけれども大体二~三きの中玉が歓迎されるので、単位当りの栽植本数を増すことが必要である。外葉の小さい極早生種は密植可能だが中晚生種のうちで外葉大きく、しかも盛夏に生育最盛期を迎える品種は株間が狭いと通気悪く、病害虫の被害をうけ易い。栽植距離の標準は次の通り。

(幅畦×株間)
(歩) (歩)
早生種 10×10
中生種 10×10
中晚生種 10×10 100~120

(3) 施肥

カソランの養分吸収量を見ると窒素、カリが多く、磷酸は多くない。外葉と球の三要素量を時期別に調べた西村氏の試験によると、葉に含まれている窒素とカリは大体同じ位の量であるが、結球の始まる頃迄、窒素よりカリの方が多く吸収され、結球が始まると結球部に移動するため、外葉部の三要素は一時的に少なくなつてゐるが全体

第3図 カンラン時期別三要素吸収量 (西村氏)
(1株当り黒葉サクセッション 播種7月15日)



(4) 病害虫の防除

カンランの病害として問題になるのは、根瘤病で育苗の項で述べた様に苗床で完全に防除すれば、定植穴にP·C·N·B剤を九~一三倍施し良く攪拌して植付けると殆ど問題にならない。ただこの場合土が乾いていると効目が少ないので注意を要する。

その他露病、白斑、黒斑病には水銀ボルドーを散布すると良いが、問題は結球後半圃場の多湿とか、過熱による二次的病害の発生で適切な栽培管理と計画的防除が必要であろう。カンランの害虫としてはヨトウ、アオムシ、アブラムシなどで、ウツカリすると大害をうける。ヨトウは年二回、アオムシは二~三回の発生を見るが、幼齢時ならD·D·T、砒酸鉛の殺虫効果高く、散布のおくれた場合エンドリンを使用する。なおゴマの原因といわれるスリップスの被害も乾燥した年に多いので低

度がいい。上部は雨水の入らない程度にモミガラを置いて、切口を上にして並べ、モミガラをはさめば二~三段重ねても良

い。上部は雨水の入らない程度にモミガラ、カラ物をかける。翌春迄の貯蔵には根付のまま、排水の良い場所に掘った幅六〇cm深さ三〇cmぐらいの溝に密に並べて貯蔵する。球の上部を地面と平らになる位にして、掘りあげた土を溝の両側に盛れば防寒出来、七~八分結球程度のものなら球の上部に何もかけなくてもよい。

出荷、貯蔵法

カソランの養分吸収量を見ると窒素、カリが多く、磷酸は多くない。外葉と球の三要素量を時期別に調べた西村氏の試験によると、葉に含まれている窒素とカリは大体同じ位の量であるが、結球の始まる頃迄、窒素よりカリの方が多く吸収され、結球が始まると結球部に移動するため、外葉部の三要素は一時的に少なくなつてゐるが全体

</